

WUOC2016 報告書

群馬大学大学院 1年 小野澤清楓

○はじめに

私がオリエンテーリングを始めたのは大学 2 年生の時からです。オリエンテーリングとの出会いは、他大学に遊びに行ったときに、たまたまオリエンテーリングクラブの募集チラシを発見したところにあります。中学で陸上部、高校で山岳部、大学で陸上部に所属していた私は、「森を走ろう」のキャッチフレーズに釘付けになりました。そして、「この競技面白そう！やってみたい！」と思ったのです。ところが、残念なことに私の大学にはオリエンテーリングクラブがありませんでした。本当に「ゼロ」からのスタートでした。しかし、「やるからには世界大会に行ってやる！」それが私の大きな夢でした。

あれから 3 年、そんな私の夢がついに実現しました。

○ユニバーシアードに向けて

今年度はスプリントの強化選手に選出して頂いたため、特にスプリントに力を入れていました。練習にスプリントエクササイズやストリート 0 を取り入れるなどの工夫をしました。しかし、今年の 1 月頃から膝を負傷してしまい、思うように練習を積むことができない日々が続きました。4 月の選考会では、日本代表には選んでいただいたものの、自分の思うようなレースをすることができず、複雑な心境でした。膝の違和感は 6 月頃になってからようやく改善され、そこから心身ともに良い状態へと向かっていきました。ユニバーシアード本番には心身ともに安定し、練習量は少し不足してはいたものの、それなりのコンディションで臨むことができました。

○スプリント 女子(3.3 km 115m) (84 人)

1 位 KOSOVA Denisa (CZE) 16:28

60 位 小野澤 清楓 22:19

スプリントのトレインは、リラフレドという観光地のお城と城壁、その外側の集落がトレインとなっていました。全体的に見て、道が複雑に入り組んだ難しいコースでした。

初めての国際レースということもあり、緊張も不安も大きかったので、まずは記録を残すことが第一だと考えました。結果はあまり良くはありませんでしたが、国際レースの雰囲気やレベルの高さを知る良い機会となりました。海外のスプリントは、日本のスプリントよりも難易度が高く、更にスピーディーであると実感しました。周りの選手に比べて、自分は地図を読むのも遅いし、足も遅い。今後多くの課題と向き合ってゆく必要性を感じました。

○スプリントリレー

1位 United Kingdom 54:57

DISQ Japan

女子1走 (2.0 km 10m) (24人)

1位 KAASIKU Evely (EST) 14:15

23位 小野澤 清楓 18:35

スプリントリレーのテレインは、ミシュコルツの市街地でした。日本では市街地でレースをすることがないため、初めての経験でした。レースの前日には、レーステレインの下見が可能だったため、日本チームでレーステレインをくまなく歩きました。下見をしたことで、本番は落ち着いてレースに臨むことができました。

私は1走を務めました。スタートと同時に飛び出した選手たちのスピードには、ついて行くだけで精一杯でした。何とか集団に食らいつき、序盤は他国の選手と並んで走っていました。しかし、3→4のミスで少し集団から遅れ、6→7のミスで完全に集団から置いて行かれてしまいました。レースの後半は一人旅となり、苦しいレース展開となりました。私の現在の力量では、リレーの集団のペースに合わせて走ると、地図読みが間に合わないということを実感しました。しかしそれでも焦ってついて行ってしまったので、地図読みが疎かになり、結果としてミスを重ねてしまいました。もっとハイペースで地図が読めるように、そして地図が読み切らないときには、落ち着いてしっかり地図を読めるようになる必要があると思いました。

○リレー 女子 (A19 チーム)

1位 Sweden A 1:56:44

18位 Japan A 3:22:04

女子3走 (5.6 km 190m)

1位 MYHRE Ingjerd (NOR) 39:36

小野澤 清楓 1:22:05

リレーのテレインは、全体的にのっぺりとした地形で、海外特有の微地形や湿地などは存在せず、日本人にとっては対応しやすいテレインでした。

私はフォレストに1番不安がありました。特に、今回のユニバーシアードでは、フォレスト種目はこのリレーのみでした。レースの前日に、大西さんに付き合ってもらって併設クラスに参加したことで、その不安は少し拭うことができました。本番では、5分程度のミス

を3回くらい繰り返してしまい、チームの中では足を引っ張ってしまう結果となりました。しかし、海外のフォレストレースを走りきれたことは、少なからず私の自信となりました。今年の遠征は、スプリント種目メインとなっていましたが、日本に帰ったらフォレストももう少し頑張りたいと思うことができました。

○全体を通して

初めての国際レースだったので、沢山の不安がありました。レースのことはもちろん、現地での生活や食事なども心配していました。日本チームのみんなに支えられて、無事に遠征を終えることができほっとしています。色々な意味で、大きく成長することのできたユニバーシアードだったと思います。

国際レースに出場したことで、海外の選手との歴然とした差をこの目で見ることができました。それは、私にとって非常に良い刺激となりました。国際レースに出場したことはゴールではなく、また新たなスタート地点に立ったような、そんな気持ちです。

○さいごに

オリエンテーリングを「ゼロ」からスタートして、ここに辿り着くまでの道のりは、正直なところ厳しいものでした。最初はわからないことだらけでした。情報収集や人脈作りから始め、大学でクラブを立ち上げ、他大学・他クラブの練習会や合宿に混ぜてもらい基本技術を習得しました。遠征は1人で行くこともありましたが、たいていは群馬オリエンティアにお願いして乗せて行ってもらいました。平日はいつも一人だったので、日頃の地図読みや大会の反省、大会のエントリーは全部自分でやりました。一人でやることを寂しく感じることもありましたが、練習環境において不利だとも思いました。しかし、逆に一人だから注目してもらえたり、頑張れたなとも思いました。

そして、何より周りの方々の存在が大きかったです。ここまで来るのには、到底自分一人の力では無理でした。本当に多くの方が力を貸して下さいましたからこそ、自分はここにいると思っています。山西先生をはじめとしたJ O Aの方々、オリエンテーリングを始めた頃から応援して下さった群馬オリエンティアの皆様、クラブの立ち上げや国際大会出場にあたって協力して下さいました群馬大学の先生、練習会や合宿に快く迎えてくれた人間OLCや新潟大学の皆さん、その他多くのクラブ・大学の皆さん、群馬大学陸上部の皆さん、群馬大学オリエンテーリング部の皆さん、家族・親戚の皆さん、大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。